山城国一揆前後における近隣諸国の動きについて

多田　望

卒業論文において、「山城国一揆にみられる惣国について」という題目で考察を行った。修士論文でも山城国一揆を中心に研究を進めようと考えた時、当時の畿内、特に南山城の近隣諸国や幕府の権力構造との関係が大きく左右していたため、山城国一揆をとりまく情勢の把握が必要と感じた。そのとりまく勢力として幕府・細川氏・畠山氏・興福寺を取り上げ、地域としては大和・摂津・河内・和泉を取り上げて考察を行う。

まず、国一揆の行われた地域の再考察をする。国一揆が起きた地域を綴喜・相楽・久世の宇治川以南の地域とする立場にたち、当時の特色を考察したい。南山城は、大きな水運である木津川を抱え、また幕府の膝下ということで料所化が着々と進められていた。さらに、寺社・公家の荘園を多く抱えていたことも忘れてはならない。存在する荘園の中で圧倒的に多かったのが興福寺支配の荘園である。興福寺はそれら荘園の代官に南山城の国人衆を就任させたりして、守護権力の及ばない南山城地域を荘園・国人を通して支配していたと考えられる。

興福寺が大和国で強大な権力を振るい、支配力を強めると大和各地の国人衆が在地武士団として力を持ちはじめ、興福寺に属する形をとるようになる。彼らは衆徒・国民と呼ばれ、しだいに実力を現わしはじめている。しかし、文

明七（一四七五）年四月になると一乗院と大乗院による主導権争いが起き、衆徒・国民にまでその抗争が波及することになる。一乗院と大乗院それぞれに分属する形をとり、衆徒・国民間の抗争が目立つようになる。大和の国人達はそのような環境の中で、興福寺に従いながらも自立への傾向を強め、興福寺領の荘園などを押領するようになる。その動きは、南山城の荘園にも及んだのである。すでに、文正元（一四六六）年には京都の勢力ともつながっており、しだいに興福寺の下知に従わない者も現れてきていたことだろう。そして、その抗争は応仁の乱へと進んでいくことになる。衆徒・国民の抗争では筒井党と越智党の争いが目立ってくる。畠山家の家督争い、応仁の乱とことごとく両者は対立の立場を保っている。大和国人衆は自らの勢力拡大のため、幕府勢力とのつながりを選んだといえるが、国人相互の対立・抗争が激しく突出した国人が生まれなかったのであろう。そして、各抗争の戦火が南山城にも波及していくのである。

幕府勢力の中心である細川氏と畠山氏はそれぞれ摂津・和泉・河内を手にしてから畿内近国の大大名に生長している。両氏ともそれら領国を、他の守護大名の反乱を抑えるという軍功によって与えられている。分郡守護制とそうでないかの違いはあるが、同時期に台頭したこの両氏こそ今後の幕府の動きを左右するのである。両氏は幕府内の主導権を代々争っている。永享からか嘉吉にかけての細川持賢と畠山持国、嘉吉三（一四四三）年の加賀国守護職をめぐる争いに代表される細川持賢と畠山持国、そして応仁の乱前後にみられる細川勝元と畠山義就である。摂河泉では、守護である細川氏・畠山氏が争うことで混乱状態に陥ることは必至のことであった。両氏が守護となり、領国支配をする上で注目したいのは、在地の国人衆を登用している例が少ないということである。摂河泉の国人衆は細川・畠山の強大な力を使って勢力拡大を考えていたことだろう。しかし、守護権力による地元国人不採用策から発展が制約さ

れたといえるのである。

南山城地域の国人衆とつながりが深かった細川氏は、畠山氏と争いながらも着々と幕府内での実権を握るようになっていた。特に政元の時代になるとそれが顕著に現れている。まず、畠山家の家督争いにおいて父勝元の関係からか政元は政長を支援していた。しかし、争いが進むにつれて裏で義就ともつながっていたのである。両者を混乱させ、畠山氏そのものの弱体化を狙っての行動ではないかと考える。そんな時に南山城の国人達が両畠山の撤退を要求する国一揆を起こした。その背景には、畠山氏の弱体化をはかり、南山城地域の支配強化をねらう政元の意図がおおいに絡んでいたことだろう。一方、将軍義政や伊勢氏を中心とする幕府は国一揆成立直後の御教書より山城国御料所化を考えていたことがわかる。国一揆による畠山軍撤退は、細川政元・幕府権力の支援があったため実現したといえる。しかし、国一揆解体時は違っていた。国一揆解体前、稲屋妻城で南山城国人、特に細川氏の被官であった者達が守護権力と戦っている。しかし、この時国人衆は長年頼みとしていた細川氏ではなく、赤松氏に頼ろうとしているのである。国一揆が解体した明応二（一四九三）年、京都では明応の政変といわれるクーデターが起きている。それは、畠山基家（義就の子）を討伐しようと自ら出兵した将軍義材を廃立に追いやり、新将軍を擁立するというものであった。政元は幕府での地位を確保するため、畠山を退ける目的を持った山城国一揆を支持したが、いざ国一揆解体前の合戦では将軍義材廃立の計画を優先させ、南山城には援軍を送らなかった。山城国一揆は政元による山城国領国化の過程の中に位置付けられるだろう。

山城国一揆成立は、背後の細川氏勢力・幕府勢力が関係していたと考える時、かつての山城国守護畠山氏の勢力を排除し、後の管領細川氏の勢力が浸透する上で大きな画期であったという面も持っていた。明応の政変以後、幕府内

の政元の専制化や山城・大和・河内などにおける細川氏権力の増大がみられ、畠山氏の衰退が著しい。そして、南山城の国人衆は管領細川政元を頂点とする支配体制の中に組み込まれていくことになる。